

経王殿御返事

文永十年八月 五十二歳

日蓮がたましひをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給へ。仏の御意は法華経なり。日蓮がたましひは南無妙法蓮華経にすぎたるはなし。妙樂云はく「顕本遠寿を以て其の命と為す」と釈し給ふ。経王御前にはわざはひも転じて幸ひとなるべし。あひかまへて御信心を出だし此の御本尊に祈念せしめ給へ。何事か成就せざるべき。「充滿其願、如清涼池」「現世安穩、後生善処」疑ひなからん。(六八五頁)

本日は令和六年度一年度の宗祖日蓮大聖人御報恩御講を奉修し奉った次第であります。私達一同は、日蓮大聖人様に依って建立された本門戒壇の大御本尊、三大秘法受持の妙行によって、一人残らず、南無妙法蓮華経と唱えて即身成仏する、現世安穩後生善処の大利益を頂けるのであります。この大利益をこの上ない有難いことと、仏祖三宝尊に厚く御報恩謝徳申し上げた次第であります。就きましては只今拝読申し上げます、経王殿御返事の一文に因みまして、少々御法話申し上げます、本日の御報恩の一端にお供え申し上げます。

本抄は、文永十(一二七三)年八月十五日、日蓮大聖人が五十二歳の御時、佐渡配流中に認められた御書であります。宛名の経王御前は、前年に生まれたばかりで、実際には母親に対する書であると拝せられます。また経王御前は、この時病魔に冒されていて、その平癒の御祈念を大聖人に願ひ出たことに対する御返事です。

内容は、まず御供養の御礼を述べられ、次いで授与の御本尊を固く信受すれば病気は必ず平癒すると仰せられ、より強盛な信心に立つよう激励されています。特に本日拝読の箇所では、南無妙法蓮華経の御本尊は大聖人の魂そのものであるとして、信じ祈念していくことの大事を教示されています。

大聖人は、弘安二(一二七九)年十月十二日、出世の本懐として本門戒壇の大御本尊を御図顕されました。

この大御本尊について、総本山第二十六世日寛上人は「弘安二年の本門戒壇の御本尊は、究竟の中の究竟、本懐の中の本懐なり。既に是れ三大秘法の随一なり、況んや一閻浮提総体の本尊なる故なり」(観心本尊抄文段・御書文段一九七)と指南されています。また、第六十七世日顕上人は、この大御本尊と寺院や信徒宅の御本尊との関係について、「どの御本尊様も大聖人一期御化導の究竟たる本門戒壇の大御本尊様が根本となつており、その本門戒壇の大御本尊様によって開会せられた御本尊様はすべて、根本の大御本尊様と変わりのない功德が存するのであります」(大日蓮・平成十一年十二月号)と御指南なされているように、戒壇の大御本尊こそ功德の根源なのです。

拝読の御文に「あひかまへて御信心を出だし此の御本尊に祈念せしめ給へ。何事か成就せざるべき」と仰せのように、私達は御本尊を信受し、真剣な唱題のもと強盛に祈つていくならば、一切の願いを必ず成就できるのです。この意味からも、いまだ御本尊を安置で

きていない家庭があるならば、一日も早く御安置できるような努めましょう。

ところで、今の世は、自分さえ良ければと云う身勝手な、自己中心の人の群れ、倫理道徳の省みられない、社会秩序の乱れ、道徳モラルの欠如から、親が子を殺し、子が親を殺めると云う、畜生の世界にも見られない殺生の残虐が、日常茶飯事に行われ、或はそれ以下の妄語・飲酒・偷盗・邪淫の横行は云わずもがなの現状であります。これ皆謗国、謗法の報いであり、国の果報そのものであるとの御教示が、日蓮大聖人様に依る、立正安国論の警告であります。

私達の信心は、即ち、このような自己中心の人々の横溢する社会に、謗法を破折し、自己中心の者を断罪して、妙法信受の清気清風を吹き込んで、このような苦の娑婆世界を、仏の理想の国土に変革する、このような国家像を立正安国論(二四八頁)には「仏海の白浪を収め、法山の緑林を截らば、世は義農の世と成り国は唐虞の国と為らん。」と仰せであります。即ち、正法を立てるならば、世の中は堯舜(堯王と舜王のこと。ともに中国古代の帝王で善政を行った名君として名高い王)、禹湯(禹王は夏王朝の始祖と伝えられる。湯王は夏王朝の最後の王と言われ、殷王朝を創設したと言われている)の理想国家となるのであります。即ち、唐国の堯王は中国古代の聖天子であられ、孝養の誠をもってその徳政を敷いて、良く国を治め、万民はその恩恵に浴した良き時代の国家像であり、その堯王は、舜王の父が盲人でしたが少しも蔑ろにせず、一心に誠を尽くして、親孝行に専念しました。このことを、真言見聞(六一五頁)には「唐堯は老ひ衰へたる母を敬ひ、虞舜は頑なる父を崇む」とありますように堯王は老い衰えた母を敬い、舜王は分らず屋の頑固な父を敬い、陰日向なくそれぞれ孝養を尽くした人でした。この舜王の親孝行の徳を聞いて堯王は、天子の位を是非お願いしますと舜王に譲ったのであります。この王位継承を、武力に依らず穏やかな内に譲るといふ意味で、禪譲と云うのであります。

然るに日蓮大聖人は、こういう理想の国家が、現実のこの娑婆世界の中に実現するよ
うにと、身を賭して、その先頭に立たれたのであります。そして、種々御振舞御書(一〇五七頁)には「わたうども二陣三陣つゞきて」と仰せられ、私達一同にもこの大折伏戦に馳せ参ずるよう励まされつつ、生涯に亘ってこの道を歩み続けられました。

末法今日の修行とは唱題と折伏行であり、私達はこの唱題と折伏を行することにより、謗法と同罪の失を免れると共に、過去遠々劫から積んできた不幸の根源である宿業を罪障消滅させていただけるのであります。

持妙法華問答抄(三〇〇頁)には「須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勧みのみこそ、今生人界の思出なるべき。南無妙法蓮華經」と仰せであります。

私たちは、過去遠々劫より正法を知らず、苦悩の人生を流転して来たのであります。幸いにして、今生において値い難き仏法に巡り合い、妙法を信受することができたということは、本有常住の妙法に我が身を住せしめる千載一遇の機会に巡り合ったということとであります。故に大聖人様は、妙法に巡り合った今生においてこそ、自行化他の信心

に励み、迷いの根源を断ち、現世を安穩にし、後生善処の因を作っていきなさいと、仰せになつて居るのです。四菩薩造立抄（一三七〇頁）に「日蓮が弟子と云つて法華經を修行せん人々は日蓮が如くにし候へ。さだにも候はゞ、釈迦・多宝・十方の分身・十羅刹も御守り候べし。其れさへ尚人々の御心中は量りがたし」と仰せです。

これは自行の面に於ての修行を御指南になつた御文であります。つまり、大聖人の弟子檀那となり、法華經（南無妙法蓮華經）の修行をし、成仏をめざす者は、大聖人のなされて居るように、また大聖人が教えられているように修行していきなさい。そのように修行をしてこそ仏天も守護してくれるという意味であります。

私たちは日蓮大聖人の仏法を信仰しているのでありますから、大聖人の仰せのとおりには仏道修行をしていくことが大切であり自分勝手な信仰の在り方、自分なりの仏道修行の仕方というものは禁物です。それ故に大聖人は門下全般の人々に対して、同書（一三七〇頁）に「私ならざる法門を僻案せん人は、偏に天魔破旬の其の身に入り替はりて、人をして自身ともに無間大城に墮つべきにて候」と仰せになつて居るのです。すなわち、「己義・邪見」を構える人は、人を惑わし、自他共に正信を破壊する天魔であり「無間大城」に墮ちるであろうと厳しく誡められて居るのです。

例えていえば、薬を服用するにも、医師の指示に従つて正しく服用することによつて効果もあり、飲み方を間違えると、却つて劇薬となつてしまうことがあります。それと同様に、信仰に於ても自分勝手な仏道修行はいけません。すべて大聖人様の仰せのとおり修行をするということが大切なことでもあります。これをまず信仰における基本と考へていただきたいと思ひます。

次に、信仰の上で大切な事は、「御本尊様に対する確信を持つ」ということです。その確信とは具体的に大聖人は阿仏房尼御前御返事（九〇五頁）に「法華經の意は一切衆生皆成仏道の御經なり。然りとはいへども、信ずる者は成仏をとぐ、謗ずる者は無間大城に墮つ。」と仰せられています。つまり、ここに仰せの法華經とは、末法のための文底下種の法華經、すなわち大聖人の顕わされた御本尊様のことです。即ち、この文の意は、「この御本尊様は、あらゆる人が成仏の境涯を得ていくための法である。それ故、御本尊様を信じて信仰する者は幸せになつていけるが、御本尊様に背く者は無間地獄に墮ちるのである」と申されて居るのです。故に御本尊様に対する確信とは「信ずる者は成仏を遂げて幸せになり、背く者はことごとく不幸になつて無間地獄に墮ちる」との仰せを、心の底から信ずること、これが最も「基本の確信」であります。

では、御本尊様に対する確信を持つためにはどうしたらよいのかと云えば、常に「御本尊様を中心とし、御本尊様を根本とする」事です。そして具体的には、御本尊様に向かつて信を入れた勤行・唱題を心ゆくまで行じ、体得していくことこそ大切なことであります。

そして大事なことは、唱題とは、三大秘法の本門の題目の実践であり、根本の修行で

す。三大秘法稟承事（一五九四頁）に「日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」とあるように、自行の唱題行に化他の折伏行が伴わなければ本門の題目とはなりません。

日蓮大聖人は松野殿御返事（二〇五一頁）に、「然るに在家の御身は、但余念なく南無妙法蓮華経と御唱へありて、僧をも供養し給ふが肝心にて候なり。それも経文の如くならば随力演説も有るべきか」と、正法を護持する者にとつて、御本尊への唱題と仏祖三宝尊への供養、そして経文に説かれるごとくに随力演説していくことが大事であると仰せです。

なお、その弘通に当たっては義浄房御書（六六九頁）に「此の五字を弘通せんには不^レ自惜身命是なり」とあるように、不自惜身命の精神で臨まなければなりません。

また、末法において自己の信解の力に随つて弘通（演説）することの元意について言えば、それは下種の法華経、すなわち日蓮大聖人の仏法に随順し、血脈法水を信じて、これを誤りなく伝え弘めていくことです。

御義口伝（一七四九頁）に、「大願とは法華弘通なり」と仰せられているように、三大秘法の広宣流布は御本仏日蓮大聖人の御命であります。されば、私たちは身命を賭して大聖人様の正法を弘通していかなければなりません。法華初心成仏抄（二二一六頁）に、「法華経を強ひて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし、謗ぜん者は毒鼓の縁となつて仏になるべきなり」とあるように、順逆二縁を共に救うべく、各自がその力に随つて折伏・弘教に精進することが最も肝要なことではないでしょうか。

御法主日如上人猥下は、「もし、折伏が思うようにできなければ、相手の強情さを嘆くのではなくして、自分自身の信心の弱さ、題目の足りなさ、信心の現証体験の足りなさを反省し、真剣に唱題に励み、御本尊へ祈り（中略）折伏を続けていくことが肝要であります」（大日蓮・平成二十四年九月号）と指南されました。御本尊には、甚深なる意義と功德が具わっているのですから、折伏が成就するかどうかは私達自身の信心の強弱によるということになります。

私達は、今まで以上に御本尊を固く信じて唱題に励み、自身の成仏はもとより、大聖人の御遺命である広宣流布達成のため、本年こそ全講員が立ち上がり、勇猛果敢に折伏に挑戦してまいりましょう。

「折伏前進の年」が始まりました。皆様には新年の元旦勤行や広布唱題会等で、各々折伏実践を決意されたことと存じます。何事においても、最初が肝心です。この一月は毎日、全国の寺院で唱題行が行われています。ぜひこの唱題行に参加され、本年一年を「信心と実践であり、行動です」（信行要文五―四二）とのお言葉のままに実践してまいろうではありませんか。

（令和六年一月度・御講の礎）